様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：４４４３２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１９２６９

研究課題名（和文）認知症の人のタイムシフト現象とその支援方法の確立

研究課題名（英文）The time-shifting phenomenon in people with dementia

研究代表者
野口　代（Noguchi, Dai）

東大阪大学短期大学部・その他部局等・准教授

研究者番号：８０７４４８５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：認知症のタイムシフト現象の実態とその関連要因を明らかにし、支援方法を確立することを目的として研究を行った。家族介護者への調査の結果、他のタイプの認知症よりもアルツハイマー型認知症でタイムシフトすることが多く、要介護度が高い人ほどタイムシフトしやすく、さらに若年の人ほどタイムシフトしやすいという結果が得られた。またタイムシフトへの効果的な対応方法とされているTherapeutic lying（治療のための嘘）の調査から、認知症の人に嘘をついたことがあると回答した人が89.2%、それによりうまくいくことがあると回答した人が94.1%、問題が起こることがあると回答した人が32.6%であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は、認知症ケアの大きな課題の1つであるBPSDの予防につながる点で意義が大きいと考えられる。またタイムシフトを起こした認知症の人は、現実の危機認識も低下しており、緊急時に自分からは避難行動を起こさない可能性が指摘されてきた。そのため、タイムシフトしやすい人の特定や、避難誘導時における適切な働きかけや対応、つまり治療のための嘘を用いた支援方法の解明は、認知症の人と介護者の緊急時・災害時の安全にもつながる点において大きな意義を持つと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study surveys family caregivers to examine the prevalence of time-shifting among community-dwelling individuals with dementia and its associated factors. Of the family caregivers, 47.1% identified time-shifting in the person with dementia that they cared for. Among these, 27.6% reported that the person with dementia time-shifted on a ‘daily basis’. The multivariate logistic regression analysis showed that AD involved more time-shifting than other types of dementia. Those who required higher levels of care were more likely to shift over time. Furthermore, the results surprisingly suggested that younger age groups were more likely to shift over time. The survey of the therapeutic lying, which is considered an effective way to deal with time-shifting, revealed that 89.2% of caregivers had lied to a person with dementia. Among these, 94.1% reported that it sometimes worked, and 32.6% reported that it sometimes caused problems.

研究分野：介護福祉学

キーワード：認知症　タイムシフト　BPSD　介護　災害　危機認識　Therapeutic lying

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

かなり昔に既に退職をして、介護施設に入居している認知症の高齢男性が「会社に行ってきます」と言って施設を出ていこうとしたら、どう対応すべきだろうか。このように認知症の人が古い過去の記憶の中で生きているような認識を持っており、現実とは違う世界にいるような状態は「タイムシフト（Time-shifting)」現象と呼ばれる（James & Jackman, 2017)。わが国においては、東日本大震災時における認知症高齢者の行動についての調査で、認知症が進行してくると、通常なら恐怖を感じるほどの災害時にも恐怖反応を示すことがなく、平然としており、自ら避難しようとしないことが示されている（岩田, 2011; Noguchi & Fujioka, 2017)。これは現実の危機認識を失っている状態と考えられ、タイムシフト現象とも深く関連していることが考えられる。

認知症ケアの現場で、上記のようなタイムシフト現象に出くわすことは決して珍しくない。実際にタイムシフト現象について介護職員に調査を行った結果では、98%の介護職員が認知症の人のタイムシフト現象を見たことがあると回答している（Gibbons et al., 2018)。

またタイムシフトした人への対応としては、介護者が真実（上記の例で言えば、数十年前に既に退職をしていること）を伝えようとしても、認知症の人は自分の認識が現実であると強く確信しているため納得してもらえず、むしろ介護者に対する不信感をつのらせ、興奮や暴言・暴力といった認知症の行動・心理症状（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: BPSD）につながることも多い。このようなタイムシフトした人に対する対応法を確立することで、日常の誘導や介助をより円滑に行えるようになるのはもちろんのこと、危険な場所への立ち入りを無理なく制止したり、避難誘導時などの支援に役立てられる可能性が考えらえた。しかし、これまでの研究では、どのような人がタイムシフトしやすいのかといった関連要因や、そのような人への適切な支援方法も明らかになっていなかった。

２．研究の目的

上記のような課題を受けて本研究では、認知症の人のタイムシフト現象の実態やその関連要因を明らかにし、さらに支援方法を確立することを目的として、以下の（１）～（４）の研究を行った。

（１）タイムシフトしている人への支援方法の確立という観点から、現在の本邦においてその潜在的な価値が期待されている一方で、課題がとりあげられることもある外国人介護士（外国人介護人材）による認知症ケアに関して文献的な研究を行った。より具体的には、外国人介護士がもつ①認知症に対する考え方（認識、イメージ）や、②ケア方法の特徴、③ニーズ（課題や必要なこと）を明らかにするために、国内外の実証的な研究を系統的に調査することを目的とした。

（２）当時の状況から、COVID-19 パンデミック下における BPSD の発生状況や、治療・対応方法を明らかにするために、コロナ禍で公表された BPSD に関するシステマティック・レビューを系統的に調査した。

（３）これまでのタイムシフト現象に関する調査は、その多くが介護施設職員に対して行われ、タイムシフトの有症率などを明らかにするにとどまっていた。そのため、わが国の家族介護者を対象とした調査を実施し、在宅の認知症の人におけるタイムシフトの有症率とその関連要因について検討することを目的とした。

（４）タイムシフトへの効果的な対応方法とされている Therapeutic lying（治療のための嘘）の使用実態や効果、有害事象を明らかにし、それを元に治療的な嘘を適切かつ効果的に用いた支援方法を確立することを目的とした。

（５）これまでの調査により、外国人介護士（外国人介護人材）による認知症ケアに関しては、外国人介護士向けの教育・研修プログラムの必要性が示唆されていた。そのため、留学生が多く在籍する介護福祉士養成校において、医療における模擬患者（simulated patient）の応用として、地域住民の協力による模擬利用者の参加を得て、学内模擬デイサービスを行った。そして、それに対する学生の不安感や、実施後の満足度、自己効力感への効果について検証を行うことを目的とした。

３．研究の方法

（１）データベース（医中誌、CiNii、PubMed）に 2020 年 10 月までに登録された、認知症や外国人介護士に関連するキーワードを含む文献（113 篇）の精査を行い、対象となった文献について目的にそって分析を行った。

（２）データベース（PubMed, The Cochrane Database of Systematic Reviews）に 2021 年 11 月までに登録された、認知症や、BPSD、 COVID-19 に関連するキーワードを含む文献（48 件）

を精査し、5 件の研究が分析対象となった。

（3）認知症の人を介護している家族 323 名を対象に Web 調査を行った。認知症である本人の基本情報（年齢、性別、続柄、要介護度、認知症のタイプ）、タイムシフトの有無や内容についてデータを収集した。収集したデータは、ロジスティック回帰分析により、タイムシフトの生起と他の説明変数との関連性を検討した。

（4）家族介護者 331 名を対象に、認知症の人と介護者の基本属性、Therapeutic lying の使用の有無や内容、頻度、効果、有害事象の有無について調査を行った。

（5）A 短期大学部介護福祉学科 1 年生 57 名が対象で、47 名が留学生、10 名が日本人学生であった。模擬デイサービスを含む 6 日間の学内実習を実施し、事前の学内実習に対する不安感等に関する 5 件法の質問紙調査と、事後の満足度に関する 5 件法の質問紙調査、また前後に一般性セルフエフィカシー尺度（GSES）による調査を実施した。GSES は、実習前後における総得点と下位因子得点に差があるかを検証するため、paired t 検定を行った。

４．研究成果

（1）分析対象となった研究（12 篇）の内訳は、量的研究が 7 篇、質的研究が 4 篇、混合研究法が 1 篇であった。全般的に外国人介護士の存在価値は高く評価されていた。その上で認知症に対する考え方が現在の科学的知見と異なっていたり、直感的・経験的にケアを行う傾向が示された。ニーズとして、認知症の人を介護することが介護負担につながっていたが、介護技術の習得について長期的には高い評価を得ており、今後、各国の特徴を把握した上で、外国人介護士向けの認知症ケアに関する研修プログラムや支援策を検討することの必要性が示唆された。

（2）パンデミック下において、①BPSD の悪化または新規発症がみられる、②その中でも、長期の隔離によるアパシー、不安、興奮が多い、③対応としては、本人と介護者への心理教育的・心理社会的介入の有効性が期待されるが、コロナ禍という現実的な制約によって薬物療法への依存が強まっている、④遠隔支援、アシスティブ・テクノロジーの活用などの効果については結論が出ていない、ということがわかった。

（3）認知症の人の平均年齢は 83.9（±8.98）歳で、うち 66.6%は女性であった。42.4%はアルツハイマー型認知症（AD）であり、残りの 57.6%は他の認知症（血管性認知症やレビー小体型認知症など）であった。家族介護者のうち、47.1%が介護している認知症の人にタイムシフトがあると回答した。このうち、27.6%が毎日タイムシフトを目にしていると報告した。また Table 1 に示したように、ロジスティック回帰分析からは、他のタイプの認知症よりも AD ではタイムシフトが多く見られることが示された。これは、AD に見られる記憶障害のためと考えられた。また、要介護度が高い人ほどタイムシフトしやすく、これは認知機能障害が要介護度に影響しているためと考えられた。さらに、若年の人ほどタイムシフトしやすいという結果が得られ、若年発症の AD の方がより進行が速いということと関係するのではないかと考えられた（Arai et al., 2001）。

Table 1　Odds ratio for time-shifting phenomenon by participant characteristics

Characteristics	*B* (S.E.)	Odd ratios	95%CI	*P* value
Gender[a]	0.1146(0.2507)	1.12	0.686 - 1.83	0.648
Age[b]	-0.6721(0.3376)	0.511	0.264 - 0.99	.0465*
Support and Nursing Care Level[c]	0.4875(0.2326)	1.63	1.030 - 2.57	.0361*
Dementia type[d]	0.7261(0.2323)	2.07	1.310 - 3.26	.00177**

Logistic regression.

Signif. codes: '**' 0.01, '*' 0.05, '†' 0.1

SE: Standard error; CI: confidence interval

a Male coded 0, female coded 1.

b <75 coded 0, 75<= coded 1

c care-required level≦2 coded 0, care-required level＞2 coded 1

d other type dementia coded 0; Alzheimer's disease coded 1

（4）認知症の人に嘘をついたことがあると回答した人が 89.2%、それによりうまくいくことがあると回答した人が 94.1%、問題が起こることがあると回答した人が 32.6%であった。また、Therapeutic lying でうまくことが多いのは、要介護者に BPSD が多い場合であり、Therapeutic lying を使うと問題が起こりやすいのは、介護者が 65 歳未満の場合や、介護者が男性の場合、

要介護者がタイムシフトしていない認知症の人の場合であることが示唆された。

（５）実習前に 54.4%の学生が不安感をもっていたが、実習後には 91.1%が満足感を得たことがわかった。また Table 2 のように、自己効力感の尺度の下位因子である「能力の社会的位置づけ」の得点が、実習後に向上する傾向がみられた（p=.0994）。

Table 2　実習前後における一般性セルフ･エフィカシー尺度の平均得点と*SD*

			学内実習前		学内実習後		*p* value
			平均	*SD*	平均	*SD*	
セルフ･エフィカシー尺度	総得点	16点満点	8.90	3.64	8.98	3.89	0.819
	行動の積極性	7点満点	4.45	1.90	4.20	2.04	0.270
	失敗に対する不安	5点満点	2.65	1.52	2.69	1.53	0.819
	能力の社会的位置づけ	4点満点	1.80	1.35	2.08	1.19	0.099

引用文献

Arai H, Tsubaki H, Mitsuyama Y et al. Early onset Alzheimer type dementia more rapidly deteriorates than late onset type: a follow-up study on MMSE scores in Japanese patients. Psychogeriatrics 2001; 1: 303–308.

Gibbons L, Keddie G, James IA. Investigating the phenomenon of time-shifting. Aust J Dem Care 2018; 7: 32–35.

岩田 誠: 神経心理学研究の新しい可能性-デメンチアと危機認知能力-. 神経心理学 2011; 27(3); 189-195.

James IA, Jackman L. Understanding Behaviour in Dementia That Challenges: A Guide to Assessment and Treatment, 2nd edn. London: Jessica Kingsley Publishers, 2017.

Noguchi D, Fujioka T. Crisis Perceptibility of People Requiring Assistance and Special Care: A Case Report. Journal of Trauma & Treatment 2017; 6(5): doi:10.4172/2167-1222.1000407

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野口　代	４．巻 20
２．論文標題 認知症の人の “ responsive behaviours（反応行動） ” に関する研究動向 ―“ BPSD ”、“ challenging behaviours（チャレンジング行動） ” からの用語の変遷 ―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石鍋浩 ， 野口代 ， 砂田貴彦 ， 伊藤美加子 ， 傘郁子 ， 山田克宏 ， 馬込武志	４．巻 20
２．論文標題 COVID-19感染拡大下における学内介護実習の実践：模擬利用者を導入した新たな試み	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要	６．最初と最後の頁 69～76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Noguchi Dai	４．巻 23
２．論文標題 The time‐shifting phenomenon in community‐dwelling people with dementia and its associated factors	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Psychogeriatrics	６．最初と最後の頁 201～202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/psyg.12920	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 野口 代	４．巻 19
２．論文標題 COVID-19パンデミック下における認知症の行動・心理症状（BPSD）に関する研究動向 ―システマティック・レビューの概観―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山中克夫，野口 代	4．巻 63
2．論文標題 認知症ケアのスタッフに対する心理職による教育的支援 BPSDのABC分析	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 1231-1237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口 代	4．巻 23
2．論文標題 認知症の人のタイムシフト現象	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地域ケアリング	6．最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口 代	4．巻 18
2．論文標題 外国人介護士（外国人介護人材）による認知症ケアに関する文献的研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要	6．最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山中克夫，小松崎麻緒，登藤直弥，野口 代，内田達二，石川 愛	4．巻 68
2．論文標題 域密着型介護老人福祉施設における地域交流スペースの活用の実態	5．発行年 2021年
3．雑誌名 厚生の指標	6．最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口 代	4．巻 35
2．論文標題 認知症の人のタイムシフト現象	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地域ケアリング	6．最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野口 代，山中克夫	4．巻 35
2．論文標題 行動分析学とポジティブな行動支援の「核心」とは何か（あるいは三項随伴性の分析ツールとしての「盆栽」ダイアグラムの使い方）へのリプライ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 行動分析学研究	6．最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kosugi Naoko, Sato Shunsuke, Yoshiyama Kenji, Noguchi Dai, Yamanaka Katsuo, Kazui Hiroaki	4．巻 .
2．論文標題 Ninchisho Chienowa-net: A web system that calculates and publishes the probability of success of coping methods for behavioral and psychological symptoms of dementia	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Proc. of the 22nd International Conference on Information Integration and Web-Based Applications and Services (iiWAS 2020)	6．最初と最後の頁 383-389
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1145/3428757.3429119	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 砂田貴彦，野口代，石鍋浩，伊藤美加子，傘郁子，山田克宏，馬込武志
2．発表標題 学内介護実習に対する学生の認識と効果検証 －模擬利用者の参加による学内デイサービスの実施－
3．学会等名 日本介護福祉教育学会第28回大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 石鍋浩，野口代，砂田貴彦，伊藤美加子，傘郁子，山田克宏，馬込武志
２．発表標題 模擬利用者を導入した学内介護実習の実践
３．学会等名 第30回日本介護福祉学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡本多喜子，大川一郎，成本 迅，堀口康太，田中真理，野口 代
２．発表標題 老年行動科学のネクストステージ
３．学会等名 日本老年行動科学会第23回東京大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 野口 代
２．発表標題 外国人介護士（外国人介護人材）による認知症ケアに関する文献的研究
３．学会等名 日本老年臨床心理学会第3回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

１．著者名 野口 代（担当:分担執筆，範囲:第13章 認知症）	４．発行年 2022年
２．出版社 医歯薬出版	５．総ページ数 234
３．書名 福祉心理学	

１．著者名 一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟	４．発行年 2021年
２．出版社 中央法規出版	５．総ページ数 248
３．書名 心理学と心理的支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関